

建物を移築する時、その姿を昔どおりに再現するのは当然のことで、私が常々、意を配るのは、その建物にふさわしい場所を用意することである。特に優れた建築家による住宅などの場合、清新な意匠や工夫が我々の眼を引くが、住む人の快適な生活を阻害しないよう、周辺環境の性格を十分にくみ取って設計され、建物への導入、眺望を意識した設えなど、さまざまに配慮が行き届いている。

芝川邸が創建されたのは今からおよそ100年前で、西宮・甲東園一帯は六甲山系が一望に見渡せる丘陵地であって、後年開通した阪急今津線の駅から長い上り坂を少々息を切らして上った先に、建物は建っていた。そして、1階吹き放ちのベランダから庭園や果樹園が見渡せ、2階茶室からは山並みが楽しめた。移築場所の風景を旧になぞらえることがこの事業の最大の眼目と考えた。

高木が密生する林の中央を切り払って

広場をつくり、甲東園のように段差を造成し、明治村創始の頃からの習いに従って、竣工後のイメージを確認するため、高さ12mほどの青竹を十数本立てて建物外形を検分、復原工事は開始された。加えて、建物に対面するまでの視線の変化をかつてのようすべく、緩い坂道をつくり、坂の最後を回り込む形とした。

建物復原に際し、難儀となった部位は2つあった。壁と屋根上である。数十年の歳月と阪神大震災で、壁の色も表情も変わっていた。また、瓦は葺き替えられていた上に、煙突は震災で見事に原型をとどめていなかったのである。

茶室研究をもって学業を終えた武田五一が狙った壁仕上げは「金唐革風漆喰壁」と思われ、左官職と塗装職に試行錯誤をお願いした。瓦は、数枚保存されていた当初材を手掛かりに半年かかって、形、色、光沢を再現してもらった。煙突は2枚の古写真（創建時と昭和初年）から復

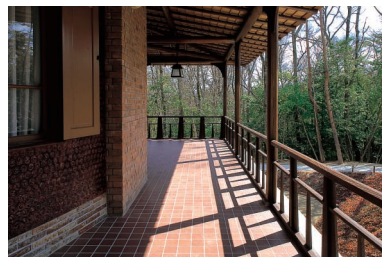
原せざるを得ず、寸法を割り出した後、「数十年前のやきものの雰囲気をつくってほしい」と注文。その難題にINAXの人たちが応えてくれた。今、地上13mに輝いている。手作りの温かみを見取っていただけるとうれしい。手作りのやきものの良さは、ベランダ周辺の幅木タイルにも活かされている。これもINAXさんの労作である。感謝。

最後に。日本的な建物は“内向き”に出来ていないようで、周りの風景を楽しむようにつくられている。森鷗外・夏目漱石住宅、幸田露伴住宅「蝸牛庵」、西園寺公望別邸「坐漁荘」など優雅な建物こそ、そのように思われ、芝川邸も、室内意匠もさることながら、落ち着いた外を楽しむようにつくられている。*

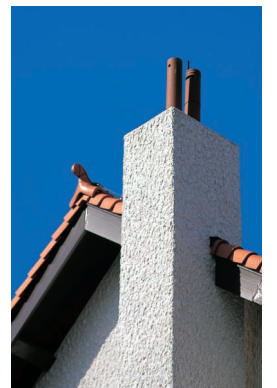
にしお・まさとし——博物館明治村 建築部長／1946年生まれ。1969年、東京工業大学卒業。1970年～、博物館明治村勤務。最初の仕事は帝国ホテル復原工事の基本設計。以後、聖ザビエル天主堂を始め、内閣文庫など約30棟の移築に従事。



1



4



5



2



3



6

- 1 東面全景
- 2 玄関・階段まわり
- 3 暖炉 2階和室の襖を開けると、暖炉が納められている。暖炉の周りのタイルを復原した
- 4 ベランダ イギリスから輸入したヴィクトリアンタイルの床は、乾式プレスによって復原。色合いは白黒写真から推測したが、制作後に見つかったオリジナルとほぼ同様であった。巾木のポータータイルは日本製。当時のばらついた色合いと形状を再現するため、すべて手作りによって復原した
- 5 煙突 オリジナルの煙突は現存していなかったため、創建当時の白黒写真から形状と色合いを推定して復原。円筒ではなく、少し円錐の形状をしているため、機械による成形後、手加工で形状を整えた
- 6 トイレ モルタルが付いたオリジナルの床が現存。それを塩酸で取り除いて再利用し、不足分を復原した。八角形白タイルと四角形黒タイルの組み合わせは、ヴィクトリアン床タイルの代表的なデザインパターン（復原解説：INAX ものづくり工房 後藤泰男）